



卒業生の皆さまへ



～学部長と各学科長からのメッセージ～

文学部長 服部 隆

卒業は始業

先行き不透明な昨今です。不安も感じるかもしれませんが、卒業と同時に、皆さんの実力を見せる時がやってきたのではないのでしょうか。卒論やゼミを思い返してください。ぼんやりとした疑問から仮説を立てるには、まず事実から出発しなければなりません。それはネットから拾えば事足りるものではなく、苦勞しながら主体的に集めたはずです。また事実から導く推論は、自分の思い込みに流されず論理的に行わなければなりません。そして結論は、読み手の頭の中も意識しなければうまく伝わらない、こんな経験もしたことでしょう。大学で身に付けるべきは、知識の蓄積よりも、経験に裏打ちされた実感です。そしてそれを成し遂げたからこそ、皆さんは卒業するのです。「卒業は始業」です。自信を持って新しい生活をスタートしてください。

(上智大学通信第 442 号より転載。(c)広報グループ)

哲学科長 長町 裕司

令和 2 年のこの春に上智大学 文学部 哲学科を卒業する、2016 年度生の君たちへ

上智大学でのキャンパス・ライフを通して日々培ってきた人間的な成長、そして文学部哲学科に身を置いて 4 年間学び続けた「自ら考える」道筋からの実りを、今日 3 月 24 日の卒業の日に共に祝いし心に留めたい一心です。SARS-CoV-2 (新型コロナウイルスの正式名称) の感染拡大が終息しない状態のため、卒業式の式典のみならず学科での集会、および丹精こめて準備してくれた謝恩会まで厳粛しなければならないことは、大学の全教職員および哲学科の先生たちと事務職員の方々にとっても心痛の思いです。ですが、自らの卒業を迎えた君たち一人一人がこれからの歩みにとってこの世界状況を人生の新たな段階への突破の痛みとしても記憶に刻み、卒業の恵みと祝福の内に信頼と希望をもって「思い出多き学舎」から羽ばたいてゆかれることを祈願しています。

史学科長 中澤 克昭

皆さんに期待すること

ご卒業、おめでとうございます。

皆さん、史学科のディプロマ・ポリシーを覚えていますか。本学科は、学生が卒業時に身につけているべき能力を次のように定めています。

1. さまざまな社会現象について広い視野から歴史的な洞察をする能力
2. 既存の研究に即して、自ら問題を発見する能力
3. 各種の史料を正確に解読し、史実を調査・分析する能力
4. 調査結果から一定の歴史像を構築し、的確に表現・発信する能力

皆さんは、これらを身につけた者と認められ、学位を授与されたわけですが、忘れてほしいのは、何のためにこれらの能力を身につけたのか、ということです。現代社会を現状固定的にではなく、歴史的に形成されてきたものとして批判的にとらえ、多元的な歴史認識と国際的な視野をもって社会に貢献する。職業や立場によって、できることは様々でしょうが、これからの皆さんに期待しているのは、そうした生き方です。ご活躍を！

国文学科長 長尾 直茂

卒業される皆さんへ

「やっとこれで勉強することから解放される」と思っている人が大多数ではないでしょうか。しかし、実は生きてゆくために必要なことを切実に学ばねばならない時期は、これから始まります。そして、この時期は命のある限り続きます。新しい知識を絶え間なく学び続けるというような単純な学びではなく、いかに生きてゆくのかを学ぶ真剣な学びなのです。正しい解答はないかもしれないし、あったとしても人それぞれに異なるものでしょう。間違ったり、迷ったり、時には絶望したりするかもしれませんが、でも大丈夫です、そんな時にこそ先人に学びましょう。そもそも「学ぶ」ということは、先人から教えを受けることなのですから。かの孔子も「吾 嘗て終日食らわず、終夜寝ねず、以て思う。益無し。学ぶに如かざるなり」（『論語』衛霊公）と述べています。皆さん、学ぶに如かずです。



英文学科長 池田 真



「幸せを感じる」人生を！

ご卒業おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。みなさんの門出に際し、はなむけのメッセージをお贈りします。それは、「幸せを感じる人生」を送ってほしいということです。そのためには「機能快」という概念が役立ちます。例えば、ストレッチをして普段使わない筋肉を伸ばすと気持ちよく感じます。それと同じく、五感にせよ、思考にせよ、いつもは使わない機能を用いることで快感が得られます。4月からは皆さんの世界は一気に広がり、初めての機能を引き出すことが多くなります。その際に、楽しく感じたり、夢中になれたなら、この「機能快」という言葉を思い出して下さい。そして、仕事にせよ趣味にせよ、みなさんにとっての「機能快」をどんどん見つけ、「幸せを感じる人生」を歩んで下さい。最後にお願いです。上智大学での生活が意味のあるものであったなら、保護者の方に「大学生活、楽しかったよ」と伝えて下さい。それが何よりも感謝の言葉となります。



ドイツ文学科長 中井 真之



卒業生へのお祝いの言葉

皆さん、ご卒業おめでとうございます。

入学してから卒業に至るまでのドイツ文学科での4年間、あるいは5年間、6年間の学生生活を振り返ってみて、どのようなことが思い出されますか。1・2年次に週6回ドイツ語の授業を受けた日々、3・4年次の講義や演習科目でドイツ語を通してドイツ語圏の文学、文化、思想に触れ、その理解・享受に努めたこと、最終学年に1年をかけて執筆した卒業論文、半年間あるいは1年間ドイツ語圏に留学した人もいるでしょう。これらのことを通して、皆さんは他のほとんどの日本人が持つことのない物の見方や感じ方、考え方を身につけたはずです。そしてそれは生きた教養となって、皆さんが仕事や個人の生活で出会う困難を克服するのを助けてくれるでしょう。今後の皆さんのご活躍とご健康を祈念するとともに、教員一同、また皆さんにお会いできるのを心待ちにしております。



フランス文学科長 福田 耕介



フランス文学の痕跡

ご卒業おめでとうございます。

2016年度のフランス文学科の新入生ガイダンスが、私にとって初めての新入生ガイダンスでした。その時に遠藤周作の言葉を引いて、「一生付き合っていくことのできる本」と出会ってほしいと話しましたが、きっとそんな本を何冊か手にしていることと思います。私にとってそれは遠藤周作と同じ『テレーズ・デスケルー』であり、この小説、この作家との出会いによって、人生の方向が変わったような気さえます。もちろん、大学で会うものが本だけだったはずはありません。遠藤はまた「人間は他人の人生に痕跡を残さずに交わることはできない」と書いています。フランス文学や、上智での出会いがみなさんに残したに違いない痕跡を確かめながら、ぜひ大きくはばたいてください。



新聞学科長 渡邊 久哲



新聞学科を卒業される皆さんへ

このような形で祝辞を伝えなくてはならないのは甚だ残念ですが、皆さんご卒業おめでとうございます。上智大学新聞学科という比類なくユニークな学びの場で各人それぞれが得たものは何だったのか。それは卒業生一人一人で違っているかもしれません。しかし、ジャーナリズムやメディアについての専門的な勉強を通して皆さんが共通して養ったものは、現実を客観的・批判的に見る力であり何よりも「自分自身の頭で考える力」の筈です。今回の新型コロナウイルス禍への対応は、それが問われる1つの例でしょう。メディア報道内容の正否、流言とそれに対する人々の心理など、「これって授業でやったなあ」など懐かしく反芻しているのではないのでしょうか。これからの人生にはさらなる試練もあると思います。どんな状況下でも冷静に客観的にそして批判的に物事を見る力を身に付けて巣立つ皆さんのことをこれからもずっと見守りたいと思います。